

評

## 尾高忠明指揮 大阪フィル マーラー…交響曲第2番「復活」

## 楽団の充実示す 端正な響き

第62回大阪国際フェスティバルで、大阪フィルハーモニー交響楽団が音楽監督の尾高忠明の指揮でマーラーの交響曲第2番「復活」に挑んだ。森谷真理（ソプラノ）、加納悦子（メゾソプラノ）の独唱に、大阪フィルハーモニー

合唱団を加えた布陣である（2日、大阪・フェスティバルホール）。

どこにも力みのない様子で尾高が現れ、淡々と第1楽章（最初「葬礼」という交響詩として書かれた、独立性の高い楽章）が始まる。快速で、正確な指揮に力みがないからこそ、オーケストラはよく鳴るが、この段階ではまだ抑え気味で序曲的に響く。楽章間の長い休止で合唱団と独唱の2人が入場。親密な舞曲風の第2楽章、少し奇妙な夢のようでもある第3楽章が続く。

大阪フィルは、コンサートマスター須山暢大の加入以降、弦楽器の響きに艶が出て、特にこのマーラーの交響曲の中間楽章などが映える。オーボエやフルートをはじめとする木管群もそれぞれに魅力的だ。

第4楽章冒頭の加納の独唱には気になるところもあつたが、音楽が動き出すと次第に盛り返した。そして終楽章、合唱と金管が中心になって、いよいよ大きなクライマックスが描き出される。森谷の独唱は中でもくつきりと際立つ。ハープもオルガンも鐘も舞台外の楽隊も、当時のオーケストラにとって動員可能だったあらゆる手段が盛り込まれているのだが、それらが見事に組織されていた。

この曲は、交響曲作曲家としてのマーラーによる最初期の試みであり、それだけに多少暴走気味に思えるところもあるのだが、それがこんなに端正に響くことに（その若々しいエネルギーと老練なところの共存に）、実は少し困惑もした。だが、大阪フィルの現在の充実ぶりを示す演奏会であつたことは確かだ。

（伊東信宏・音楽評論家）



樋川智昭氏撮影